

必要なことは一つだけ

ルカの福音書 10 章 38-42 節

はじめに

今日は、「マルタ」と「マリア」という姉妹とイエス様の出会いの出来事から学んでみたいと思います。このマルタとマリアという姉妹については、「ヨハネの福音書」の 11 章にも詳しく書かれています。彼女たちには、ラザロという兄弟がいて、ラザロが病気で死んでしまった時、イエス様がよみがえらせるという驚くべき奇跡をなさいました。ヨハネ 11:5 には、「**イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた**」と書かれています。この言葉から分かることが二つあります。一つは、イエス様は、この三人を特別に愛しておられたということです。もう一つは、「マルタとその姉妹とラザロ」という順番で書かれているので、おそらくこれが生まれた順番であろうと思います。つまり、マルタが長女で、マリアが次女で、ラザロが末っ子という順番であったと思います。

この三人は、「ベタニア」という村に住んでいたと「ヨハネの福音書」には書かれています。ベタニアは、エルサレムから 3 km ほど離れた村で、歩いて 30~40 分の距離にあります。イエス様は、エルサレムに来られた時は、いつもこの三人の家に立ち寄ったようです。今日の聖書箇所には、ラザロは出てきませんが、イエス様がいつもように、マルタとマリアの家を訪ねて来た時の出来事が書かれています。

1. イエスを迎える方法の違い

38 節を見ると、「**一行が進んで行くうちに、イエスはある村に入られた。すると、マルタという女の人がイエスを家に迎え入れた**」とあります。イエス様と弟子たちが「ベタニア」に来られた時、マリアが家に迎え入れたのです。イエス様を迎え入れるということは、イエス様の弟子たちも迎え入れることを意味します。イエス様には、十二人の弟子たちがいましたから、それだけの人数を迎え入れることになります。

マルタとマリアは、イエス様と弟子たちを全く違う方法で迎え入れます。姉のマルタは、「**もてなし**」を通して迎え入れます。40 節の「もてなし」という言葉は、ギリシア語の「ディアコニア」という言葉で、「奉仕」「給仕」「接待」を意味します。この「ディアコニア」とよく似た言葉で、「ディアコノス」という言葉がありますが、これは「執事」という意味です。ですから、「執事」とは、「奉仕をする人」「給仕をする人」「接待をする人」ということになります。マルタは、教会の「執事」のような人だったのでしょうか。彼女は、イエス様と弟子たちの食事の用意を始め、様々な奉仕、接待をしていました。

一方、妹のマリアは「もてなし」を通してではなく、イエス様の「**足もとに座って**」、イエ

ス様の「**ことばに聞き入る**」ことを通して、イエス様を迎え入れるのです。「足ともに座って」「ことばに聞き入る」というのは、弟子が師匠から教えを学ぶ時の姿勢です。当時、教えを学ぶのは、男性の役割だったそうです。男性が教えを学び、男性が自分の妻や子どもに教えるのです。女性が直接、師匠に弟子入りして、教えを学ぶことはあまりなかったことのようにです。女性は、マルタのように、男性が教えを学んでいる間、台所で「もてなし」をするというのが一般的な役割だったようです。その意味でも、マリアのイエス様の迎え方は、周りが驚くような迎え方だったのです。ヨハネの福音書 12 章に出てくるのですが、マリアはある時、三百万円もする高級な香油をイエス様の足に一気に注いで、周りから「何でもったいないことをするんだ」と怒られたことがあります。それぐらいマリアという人は、周りが驚くような行動をする突然する人で、周りの目を一切気にしない、とにかくイエス様への愛情に溢れた人でした。

2. マルタの不満

このようにマルタとマリアは、全く違う方法でイエス様を迎え入れました。マルタは「もてなし」を通して、マリアは「みことばに聞き入ること」を通して。最初は、別々の方法でも良かったのですが、段々とマルタの「もてなし」が忙しくなってくると、マルタの「**心が落ち着かなくなってきた**」のです。40 節には、「**マルタはいろいろなもてなしのために心が落ち着かず**」とあります。「いろいろな」という言葉は、「多くの」という意味です。先ほども言ったように、イエス様を迎え入れるということは、十二人の弟子たちも迎え入れることを意味します。ですから、全部で十三人の「もてなし」をしなければならないのです。しかもマルタはそれを、たった「ひとり」で行っていたのです。到底「ひとり」では抱えきれないほどの「もてなし」だったのです。誰かに手伝ってほしい、しかし妹のマリアは、弟子たちと一緒に楽しそうにイエス様のことばに聞き入っている、その姿に段々と腹が立ってきたのです。次第に我慢の限界がきて、ついには言ってはいけない言葉が、マルタの口から出てくるのです。「**主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください**」。マルタは、自分の怒りをマリアにではなく、イエス様にぶつけます。手伝わないマリアはもちろん悪いが、それを何とも思わず、みことばを語り続けるイエス様も悪いと言い出すのです。これでは、せっかくの「もてなし」も台無しです。マルタの言葉に、その場の雰囲気も凍り付いたでしょう。

3. イエスの答え

では、そんなマルタに対して、イエス様は何の声をかけられるのでしょうか。41-42 節でこう言われます。「**マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女からとりあげられることはありません**」。イエス様は、まず「マルタ、マルタ」と呼びかけます。名前を

二度呼ぶ時というのは、愛情を込めて人を教え諭す時です。使徒パウロがクリスチャンを迫害していた時にも、イエス様はパウロに「**サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか**」(使徒8:4)と語りかけ、パウロを教え諭し、彼を伝道者としての道に導かれました。

イエス様はマルタへの愛を込めて、まずマルタの今の状態を明らかにします。「あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています」。マルタはなぜ心が落ち着かなくなったのか、なぜマリアに腹を立て、ついにイエス様に怒りをぶつけたのか。実は、マルタの心の根底には、「思い煩い」があったからです。この「思い煩い」という言葉は、ギリシア語の「メリムナオー」という言葉ですが、他の個所では「心配する」と訳される言葉です。マルタは、抱えきれない「もてなし」のために、「心配」になっていたのです。41節の「心を乱す」という言葉も、「心配する」という意味の言葉です。つまりここでは、「心配する」という二つの言葉が重ねられて、マルタがいかに心配していたかが、強調されているのです。マルタは、極度の心配事に支配されていたのです。「心配」の背後にあるのは、「不安」です。

私たちは、不安なことがあると心配します。そして、その心配を自分で抱えきれなくなると、誰か他人のせいにします。自分の不安の原因を、他の人のせいにしようとするのです。そして、その不安や心配がなかなか解決されないと、神様に不満を持ちます。私がこんなに苦しんでいるのに、神様は祈りを聞いてくれない、神様は私がこんなに苦しんでいるのに、「何ともお思いにならないのですか」というマルタと同じ心境になってくるのです。そしてマルタと同じように、「私だけ」という気持ちにもなってくるのです。

私たちにも心配事はたくさんあります。自分の健康、病気のこと、子どもの成長や将来のこと、仕事のこと、親の老後のことなど。私はとても心配性です。小さい頃から心配性で、幼稚園の時には、母親がちゃんと迎えに来てくれるかいつも心配でした。学校に入れば、忘れ物がないか、授業で先生から指されるのではないかといつも心配していました。今でも、私は心配事が尽きません。子どもの将来について心配しています。この教会の将来についても心配しています。高齢になった両親のこれからのことも心配しています。そのような多くの心配事を抱える私たちに、イエス様が語りかける言葉は、「必要なことは一つだけ」という言葉です。心配事で、心が落ち着かず、乱れている時に私たちがすべきことは、誰かのせいにすることでも、神様に不満を言うことでもありません。そうではなく、ただ静かに、マリアのように、「イエス様のことばに聞き入ること」です。イエス様の言葉にこそ、私たちの心を静め、私たちの心に平安を与える力があるのです。イエス様は、こう言われます。「**何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくてよいのです。これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります**」(マタイ6:31-34)。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの人生には、様々な心配事があります。心配や不安に押しつぶされそうになる時もあります。抱えきれない心配や不安を、誰かのせいにしたり、誰かに苛立ちをぶつけてみたり、神様への不満を心に抱くことさえあります。

イエス様は、そのような私たちに、「必要なことは一つだけだ」と言われます。私たちに必要なことは、イエス様のことばのうちに心の平安を見出すことです。イエス様のことばには、人間のことばにはない、特別な知恵と力があります。どうか、心が落ち着かず、心が乱れる時にこそ、ただ静まってイエス様のことばに耳を傾けることができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。